【面】

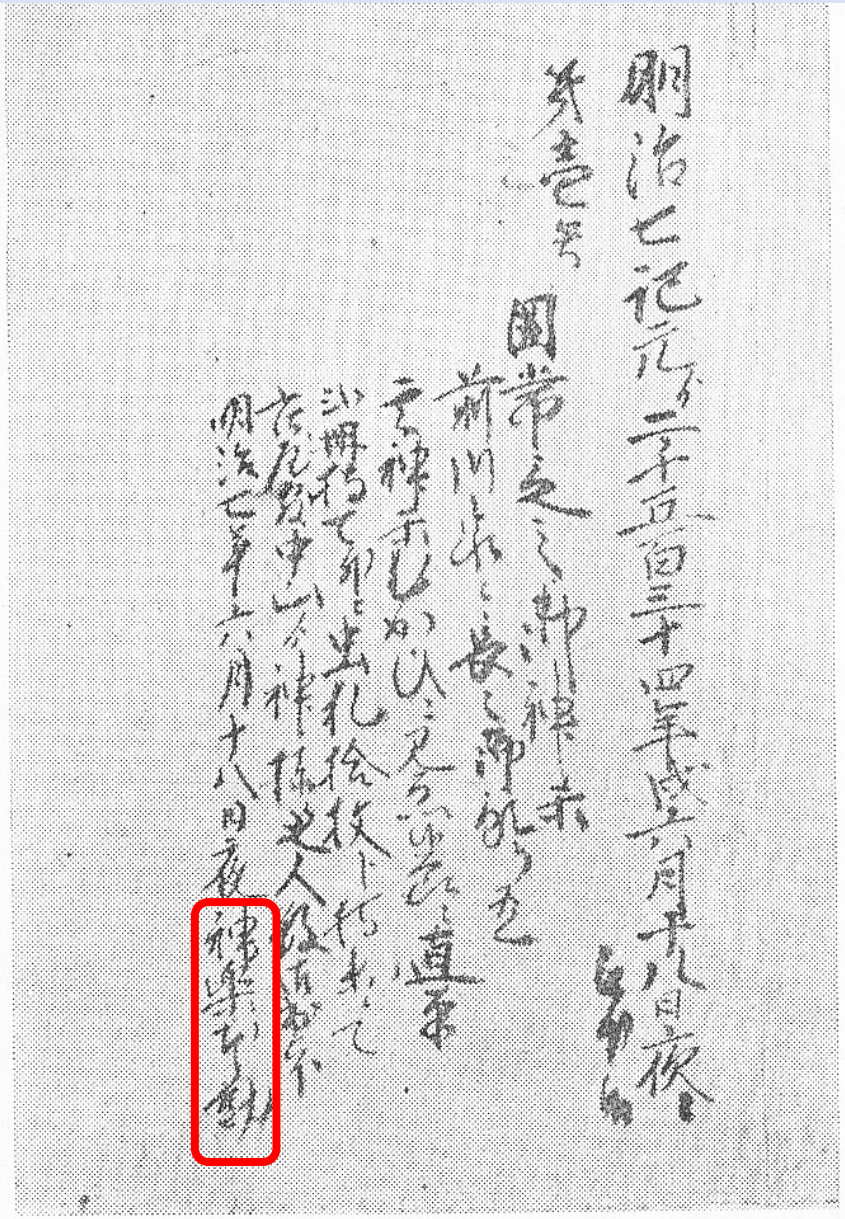
ー「神楽づとめ」でなぜ面をかぶるのか？ー

「うつし身」(『仮面の解釈学』P188.坂部恵.東大出版会.1976)から読み解く
「仮面」の本質

一号10　このさきハかぐらづとめのてをつけて
　　みんなそろふてつとめまつなり
14　りうけいがいさみでるよとをもうなら
　　かぐらつとめやてをとりをせよ

教祖の教えの根幹は、かぐらづとめにある。そのつとめでは面が使われる。なぜ面が使われるのだろうか。

『続ひとことはなし』P229. 中山正善. 1951



（紙表号一第本山中）

明治7年、はじめて面を付けてかぐらづとめが行われた。

4号1　いまのみちなんのみちやとをもている
　　なにかわからんみちであれども
　2　このさきハをふくハんみちがみへてある
　　もふあこにあるこゝいきたなり
　3　このひがらいつの事やとをもている
　　五月五日にたしかでゝくる

明治7年新暦4月に書かれたおふでさき4号には、神楽面を取りに行く「5月5日」が書かれている。

明治七紀元より二千五百三十四年戊六月十八日夜ニ被下候
第一号
国常立之御神楽、前川家ニ長々御預り有、其神楽むかひニ見ゑ候節ニ、直筆弐冊持って外ニ虫札拾枚ト持参候て、庄屋敷中山より神様之人数御出被下明治七年六月十八日夜**神楽本勤**
（『稿本教祖伝』P112 - 「第一号」とあるが内容は3号）

明治7年陰暦5月5日、教祖はかねてより依頼してあった神楽面を取りに前川家に赴き、そこで初めて面を付けての「神楽本勤」をした。左の「第一号表紙」は、その時教祖が持参されたおふでさき3号の表紙である。「天理教団」では、《教会本部でつとめられる「かぐらづとめ」と「ておどり」のつとめを合わせて「かぐら本勤」》（『改訂天理教事典』P198）と定義しており、教会本部以外のところで行われたかぐらづとめに「神楽本勤」とある貴重な史料である。

明治七年一月に第三号のおふでさきに着手、四月に第四号、五月に第五号を書かれているが、第四号三番の御歌に「この日柄いつの事やと思ている、五月五日に確か出てくる」と予告された通り、陰暦五月五日、秀司、飯降、仲田、辻らの人々を供として前川家へ出かけられ、前川杏助がつくっておいたかぐら面を受け取り、「見事に出来ました。これで陽気におつとめができます」と、一同初めてお面をつけておてふりを試みられた。

これ以後、毎月二十六日にはお面をつけてかぐらづとめが行われるようになり、毎日毎夜つとめの後では、おてふりの稽古が行われた。

『教祖絵伝』(「天理時報」1984.10.14号・平田弘史)

この絵には描かれていないが、かぐらづとめの輪の中央には、「かんろだい」が置かれる。明治6年には教祖の言い付けで飯降伊蔵が左のような「かんろだい」を作っている。明治7年5月5日の時にもこのかんろだいが置かれたと推定することも可能である。

櫟本分署跡保存会作成

かんろだいの模型作成についての記録

『復元』37号51頁

「天理教団」では、《「ぢば」とかんろだいとは不離一体・不可分のもの》(『改訂天理教事典』P239)としており、その点を考慮して読む必要があると思われる。

中　山　それでは次に模型かんろうだいの事に就いてお話を聞かして頂きませう。
高　井　模型のかんろうだいは、わしら信仰に這入った時分(明治十二年)には雨うたしでだいぶ古くなって居たで。
山　澤　あれは明治六年に教祖様の言ひつけで本席さんがお造りになったものや。其後倉の中へ入れてあったのを明治八年に出して来られたのや。
中　山　明治八年になって出してこられたと言ふのはどう言ふわけで御座居ますか。
山　澤　それは小寒様がお身上になられた時お願ひ勤めをするに就いて出して来られたのです。
桝　井　私もそう聞かして貰って居ります。
中　山　小寒様が御身上になられたと言ふのはぢば定めの後ですか。／　桝　井　そうです。
中　山　すると明治八年六月のおふでさきに　月日よりとびでた事をきいたなら　かんろふだいをはやくたすよふ
と仰せられてゐるお歌は、其史實と関連するものですか。
桝　井　それは大きい将来のかんろうがい建設をおせき込みになったものと悟らして頂きます。
高　井　あの模型は上と下とになんでも直径一尺二寸、厚さ三寸位の六角の板があり、中は直径三寸、長さ六尺位の柱になってゐたと思ふ。だいぶ古くなってゐたなあ。
山　澤　そうや、わしの父が身上の爲め水も通らん様になってお願ひして貰ったのはあのかんろうがいに對してやった。
中　山　地場定めの後、其目標として高さ六尺、直径三寸の六角の杭が打ってあったと言ふ事を聞いて居りますが、それと模型のかんろうだいとは同じものですか。／　高　井　そうや。
松　村　私は本席様の造られた模型は別にあった様にも思ふが。
中　山　私達は模型と言ふ言葉に捕はれます爲か、明治六年に本席様のお造りになった模型と言ふのは実物通りの形を縮少されたもので、お居間か何處かにお祭りになって居られたものゝ様に考へて居りましたが。
山　澤　そら模型と言ふてもきちんとしたものではなく、まん中はほんの柱の様なもので、只一番上と一番下だけが直径一尺二寸、厚さ三寸に作られてあったのや。
管長様　昔から甘露臺のお話をして居られて、それはこんなものだと言ってお造らせになり、ぢばを定められて後それを其地点に据えておかれたものか、それはそれとして別に地場のしるしとして六角の杭を打っておかれたものか、話が二つになって居る様であるが、それは充分記録に依って研究して見なければいかん。(甘露臺座談会　『みちのとも』昭和十年一月五日号)

山名大教会神楽面

この時に注文したお面は、明治17年6月24日に山名に届き、明治22年正月の大祭まで使用された。

その後、明治22年3月18日に神道天理教会山名分教会所が許可になり、その開筵式を行うにあたり、面の使用を本席に確認したところ、「面はぢば限り」とのさしづがあった。

この面は、山名が名京と別れたときに半分づつに分けて保存されたとの記述が『山名大教会史』P47にある。

明治十七年一月三十日である。御教祖の前には高井猶吉氏、井筒梅次郎氏、諸井講元の三名の者が襟を正して端座してゐた。此時、井筒氏は恭々しく手を仕へて御願の趣を申上げた。

『神様へ恐れ入ります御願ひで御座りますが、遠州では郡長とも懇意でござりまして、話しの上、十二下りお立ち勤めが出来ます故、御神楽道具をお許しを願い度う御座ります』

三人の方々は手を仕へたまゝ頭を下げてゐた。／　稍ゝ暫くの間、御教祖は静として在らせられたが軈て、

『さあ／＼許す／＼。私が許すでない。神が許すのやで』／　とのお言葉が下つたのであつた。御願の「お神楽道具及お面お許し」の儀は斯くして、鮮かにお許しを戴いたのである。／　講元の歓喜は、如何斗り深いものであつたらうか。井筒氏、高井氏も共々わが事の様に喜ばれたのであつた。（『山名大教会史』43頁.1932）

「面」を付けるという行為はどういう意味があるのだろうか。

あの人の優しさは単なる仮面だ、と言えば、優しさの裏に激しさや残酷さが潜んでいることの謂である。

能面のような顔だ、とは、表情の動かない人の形容である。その動かない表情に隠された何ものかへのいくばくかの非難と畏怖とが、この表現には混在する。

能面はしばしば「おもて」と呼ばれる。「面を冒（して進言する）」などの言葉遣いに残るこの語は、また「面目」の意味をもつ。「面伏せ」と言えば、面目を失って顔を上げられない状態を、逆に「面起し」は面目を施して堂々としていられる状態を指す。「面晴れ」は「メンバれ」と発音するのが普通だが、かけられていた不名誉な疑いが晴れて、「面を起せる」ようになることを意味するだろう。面目とは、人間の社会に対する顔向けと解せる。「体面」という熟語もある。

こうしてみると、われわれが日常的に用いている「面」という概念には、積極的、肯定的な側面と、消極的、否定的な側面とがあることに気づく。社会、自らの属する共同体のもつコードに対して、適合している個人の存在形式を、その個人の存在形式の分裂の可能性には立ち入らずに、肯定的に評価しようとする「面目」、「体面」などが一方に、また、表面的存在様式からその内面が分裂していることに目を向けて、それを隠蔽するものとしての「仮面」がもう一方に、それぞれ対置されると言える。－中略

仮面を被るという行為は、社会的な体面や面目という「現実」から我が身を解放し、一時の「非現実」な時間を与えてくれる。

たとえば西欧社会における仮面舞踏会のように、場合によっては両眼の周囲をおおうごく小さなマスクしかつけず、したがって自分が誰であるかが知る人には容易にわかってしまうような種類の仮面の下であってさえ、少なくとも仮面をつけておこなわれた行為は、その人物の現実の人格とは無関係と見なす、という暗黙の了解が関係社会のなかで成立していることさえある。仮面はこの場合、文字どおり非現実的な時間の象徴の役割を果たしていることになろう。

最初に述べたような、仮面が否定的、消極的な意味を与えられる状況は、ちょうどこの裏返しと見ることができる。なぜなら、彼の優しさは仮面だ、と言うことは、彼の「現実」の人格が、優しさからはほど遠いものであり、優しさはむしろ彼の「非現実性」である、と言っていることに等しいからである。

このような意味では、さきほどの議論をやはり裏返してみることもできる。つい数パラグラフ前に私は、仮面は「社会的な体面や面目という。“現実”から我が身を解放し」てくれるものだと書いた。しかし一方から見れば、明らかに体面や面目は「非現実」である。体面や面目の裏に、どのような「現実」の素顔が隠されているか、そして、実際に仮面をつけることによって解放され表出されるものこそ、そうした人間の「現実的」な素顔ではないか。（『仮面考』P8～11.村上陽一郎.リブロポート.1982）

「神」は目に見えない。古代の人々は見えない神を見るために、神が現れ留まる場所「神座－依代」を生み出した。それは人が生まれるという神秘を模したものであり、男柱に似たもの、或は凹所あった。具体的なものとしては、伊勢神宮の宮居の床下にたてられている心の御柱もそのようなものであり、「かんろだい」もそうであろう。

ー　なぜ面をつけるのか

『古事記』や『日本書紀』の神代巻には、例えば天之御串主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巣日神（たかみむすびのかみ）、神産巣日神（かみむすびのかみ）など、神々の名が多く誌されている。しかし、天石屋戸の前に、天宇受売命が神懸りしたとある神の名は伝えられてはいない。実はこれこそ本来のいわゆる神であったのではないだろうか。その神は、「力強い魂」と、古の人は感じていたようである。人間を守護するもの、いつも人間の乞に応じて影向（ようごう）するものとも考えられていた。

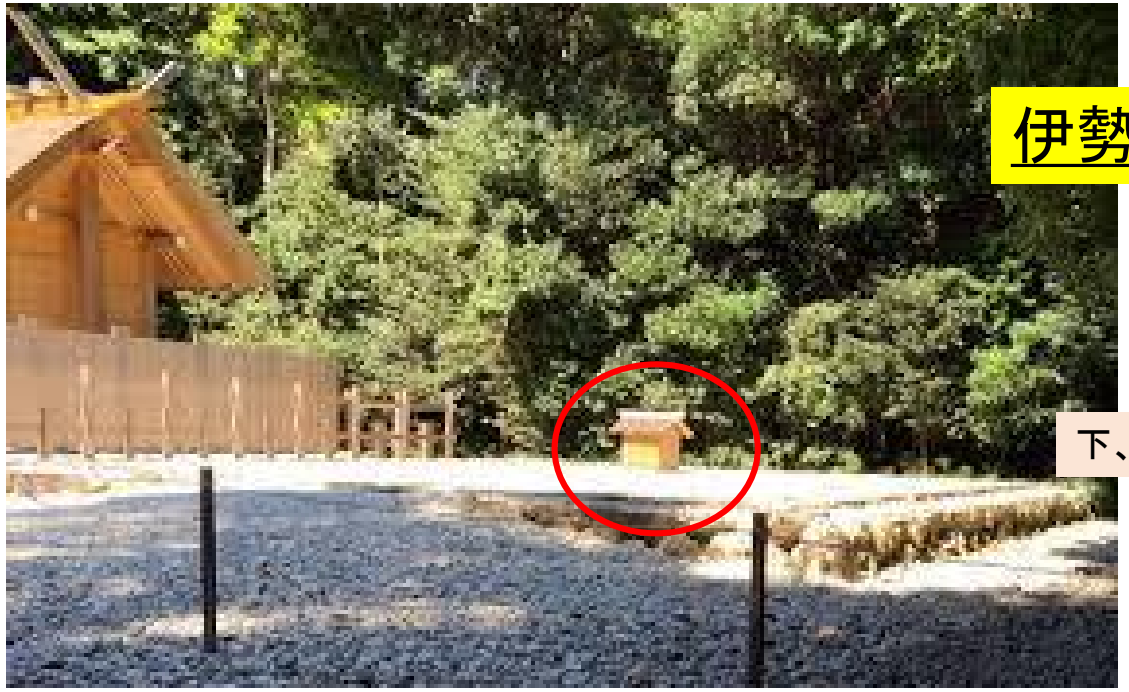
日本の古神道は、大陸にもひろく信仰されていたシャーマニズムが大切な要素になっている。人が神を下し申すときには、先ず巫女の体に下した。その巫女の口を通じて神意を伺うこともできた。我が国の古俗を残している沖縄でも、神は専ら巫女である祝女（のろ）ー先島では司（つかさ）ーに下りた。しかし本土では、更に巫女以外のものにも神は留るとされた。然らば、その巫女以外の神の留る座、即ち神座には何がなり得たのであろうか。

人が最も神秘に感じたのは、各種の自然現象などより、やはり人が生れるという事実であったと思う。生命の神秘は、二十世紀の今日にもなおとけない謎である。古の人は、そこに神の行き交いを見た。そして人が生れるのは、神、即ち強力な魂の一部が肉体を得て生活をはじめるのであり、死は魂が肉体から離れて神のもとに帰るのであると考えられていた。

神の最も留り易い所、それは神の行き交う男柱であり、或は凹所であるとも感ぜられていた。神竿の信仰は大陸にもあるが、日本のはまた明瞭であった。男柱に似たものを神座として設え、或は凹所ある所に於いて神懸りしようとした。

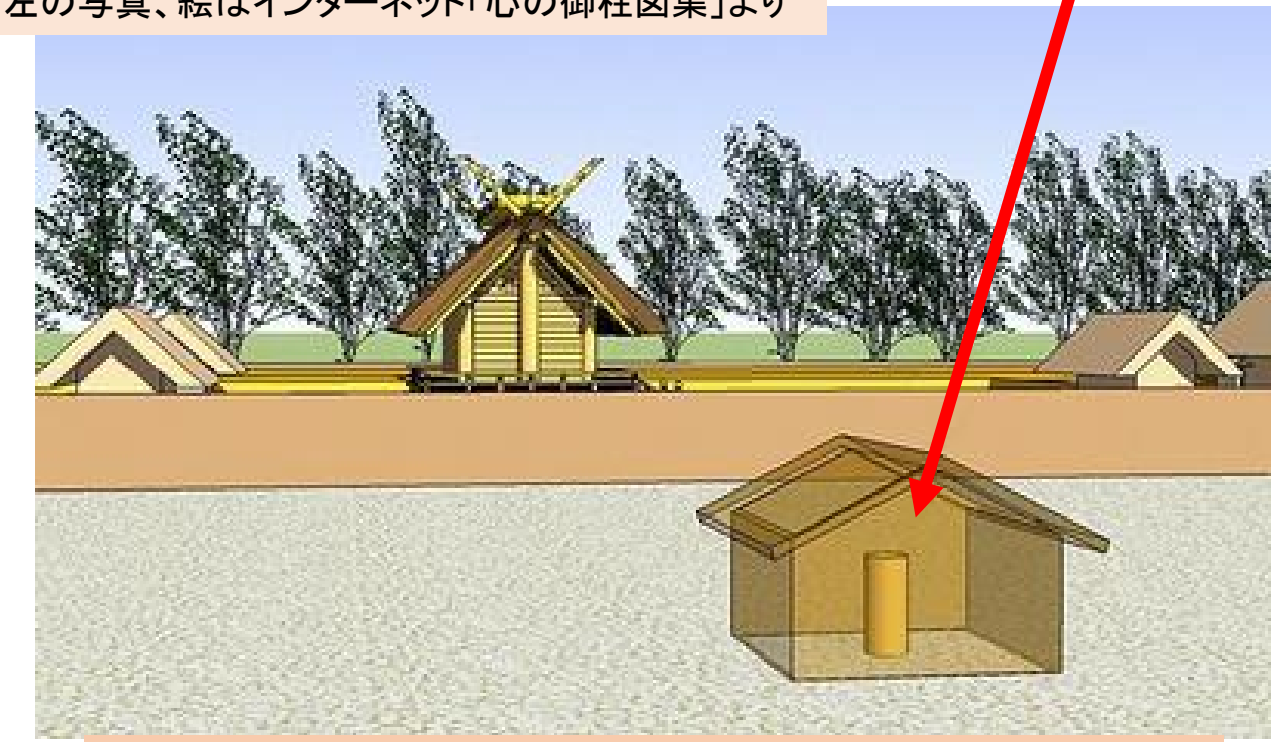
伊勢神宮の宮居の床下にたてられている心の御柱をはじめ、信州上諏訪、下諏訪各社の四隅の御柱、磐州勿来（なこそ）熊野神社の鉾立の鉾、各社の幣束も明らかに神座であり、梵天、旗、傘鉾、榊、松、杉、柳、竹、柴等も、或は大黒柱も、帆柱も神座になり得た。（「神楽と面」本田安次.『仮面』P135.1988.後藤淑編）

伊勢神宮の宮居の床下にたてられている心の御柱



下、左の写真、絵はインターネット「心の御柱図集」より

2018年現在の写真「グーグルマップ」より



伊勢神宮内宮の正殿は、隣り合った敷地で20年に一度建て替えられる。建てられていない方の敷地には「心の御柱」のみが置かれている。

さて、古く人形には魂が入ると信ぜられていたように、**仮面も依代**となり得た。宝塚劇場の渡辺武雄氏は、薩南の黒島で、神社にかけてある依代面の写真をとって送って下さった。後藤淑氏の『民間の仮面』（昭和四十四年）には、宮崎市村角町高尾神社や、愛媛県周桑郡丹原町福岡八幡など所蔵のこの種の仮面についても詳細に述べられている。私自身も、曽て豊前市四郎丸の大富神社や、沖縄石垣島桃林寺の本堂などで、この種の掛面を見ている。神輿渡御のお供の鉾の先に、神面をかけている所があるが、これも神迎えの面と云ってよいであろう。

富山県高岡市では、二上山の築山に、神迎えの神面を飾る。天狗をはじめ、その面相は様々である。神の顔はまことに人により種々に想像されていることがわかる。同じ人でも様々の神の面相を思い浮べているのである。それが最も具体的に現われてくるのが、後に述べるいわゆる神楽面である。（『仮面』P138）

大富神社

面もまた神の依代となった。

丹原町福岡八幡

「かぐら」の語原も、「神座（かむくら）」ということで、神座の前に於ける祭そのものが、もと「かぐら」であったと考えられる。然るに「神楽」の文字が宮廷で宛字されて以来は、いつか鎮魂の庭に行われる巫女の舞、もしくは諸芸能にその名が移るに至った。『仮面』P151

「うつし身」(『仮面の解釈学』P188.坂部恵.東大出版会.1976)から読み解く「仮面」の本質

仮面とは、〈うつつ〉の世界に、〈**うつつ**〉**の世界とは別種の構成原理をもった下層の深みの世界**が映じ、たちあらわれてくるところに成立する、いわば一種の〈反ーうつつ〉、超現実の世界において立ちあらわれてくるものにほかならない。仮面の立ちあらわれてくるはざまにおいては、**通常の〈うつつ〉の世界を構成する構成規則(のり)**は、一時的に宙づりにされて、すくなくともその絶対性をうばわれ、それとは別の構成規則をもった世界が、その姿を垣間見せる。この二重に意味づけられ多元的に決定された境位において、通常の〈うつつ〉の世と〈うつつ〉の身の素顔は色あせ、通常の〈うつつ〉の世界の構成規則からすれば、一片の物体にすぎぬ仮面が、世界と心の深みからくみとられたより深い生命をおびてかがやき出る。(P204『仮面の解釈学』)

「うつし身」の中で最も印象に残る文である。これは具体的には何を表現しているのだろうか。文章の流れを追いながら考えてみる。

「うつつ」の意味

うつつ【現】㊀現実に有ること。「夢か―か」㊁正気。本心。「―を抜かす〔＝夢中になって本心を失う〕・夢―〔＝夢・幻と現実との境の状態〕『明解国語辞典』P108

ゆめ【夢】㊀↔うつつ　現実の生活においては起こり得ないような事などを睡眠中に経験する一種の幻覚。・・・・『明解国語辞典』P1324

「正気」とか「現実」という意味のわりには、何かうつろさが感じられる。

押せ押せ（ドンドン行ケ）―〈浮・当世乙女織一〉

うつつ【現】《ウツシ（顕）の語根ウツを重ねたウツウツの約》①《夢・架空の物語・死などに対して》現実。「―にも夢にも我は思はずき」〈万三六〇一〉。「〔物語ノ女モ〕―の人もさぞあるべかめる」〈源氏螢〉 ②正気。「〔走ル車ノサマヲ〕―の人の乗りたるとなむさらに見えぬ」〈枕九九〉 ③《古今集の時代から「ゆめうつつ」「ゆめかうつつか」などと多く使うので、誤って》夢心地。「一同に皆入興（じゅき）して、―の如くになりにけり」〈太平記三五・宮方怨霊〉。「―、夢のやうなる事なり」〈匠材集三〉 **―どころ【現心】**①正気。「その中の人―あらむや」〈方丈記〉 ②夢心地。夢中。「二三丁が間は―になりて」〈浮・好色小柴垣三〉 **―な・し【現無し】**《形ク》気が狂ったり、物に憑（つ）かれたりして、正気がない。「兵部卿―・し。老のひがみか」〈問はず語り二〉 **―のゆめ【現の夢】**夢のような現実。多くは、逢瀬が夢のように過ぎたのを嘆いていう。「あふとみて覚めにしよりもはかなきは―の名残なりけり」〈続後撰八七九〉。 **―を抜か・す**心を奪われる。夢中になる。「宇津の山〔ノ茶屋ノ女二〕―・すたはむれに」〈俳・夢見草五〉

『岩波古語辞典』

「うつし身」は、『岩波古語辞典』を使って「うつつ」の意味を問うていく。

「うつつ」のもとは「うつうつ」で、それは「顕し」から生まれている。

のうち〉〈日葡〉

うつ・し【現し・顕し】《形シク》《ウツリ（映）・ウツシ（写）のウツと同根》①目に見えるように存在する。神の世界ではなく、この人間世界に生きている。「葦原の中つ国にあらゆる（居ルスベテノ）―・しき青人草（人民）」〈記神代〉。「顕、此をば于都斯（うつ）といふ」〈紀神代下〉 ②正気である。「―・しくもまこと（本気デ真実ニ）吾妹子（わぎもこ）我に恋ひめや」〈万七七一〉 **―いはひ**（イワ）【顕し斎ひ】現実に見えない神を、この世に見えて存在するように斎（つい）き祭ること。神を祭るに従って、神霊が天皇の身に憑（よ）りついて現われる。「今、高皇産霊尊（たかみむすひのみこと）を以て、朕（われ）みづから―を作（な）さむ」〈紀神武即位前〉。「顕斎、此をば于図詩怡破毗（うつしいはひ）といふ」〈紀神武即位前〉 **―おみ**【現し臣】《オミは人の意》この世の人の姿をして目に見える存在。姿の見えない「神」に対する。「かしこし我が大神、―ましまさむとは覚らざりき」〈記雄略〉 ▽ウツシオミがつづまって、ウツソミ・ウツセミとなる。 **現しき青人草**（あをひとくさ）現世に生きている人民。「顕見蒼生、此をば宇都志枳阿烏比等

うつ・り【映り・移り】㊀《四段》《ウツシ（写・移）の自動詞形。物の形や内容が、そっくりそのまま、他の所にあらわれる意。ウツはウツシ（顕）・ウツツ（現）のウツと同根。類義語カハリ（変）は物の内容（質・状態・資格など）が別のものになる意》①そのままの形が別の所に投影される。「わが御影の鏡台に―・れるが」〈源氏末摘花〉 ②（色や香が）そのまま他のものにつく。「わが顔にも―・り来るやうに（相手ノ）愛敬は匂ひ散りて」〈源氏野分〉 ③（もののけなどが）乗り移る。「物怪・生霊などいふもの…人にさらに―・らず、ただ

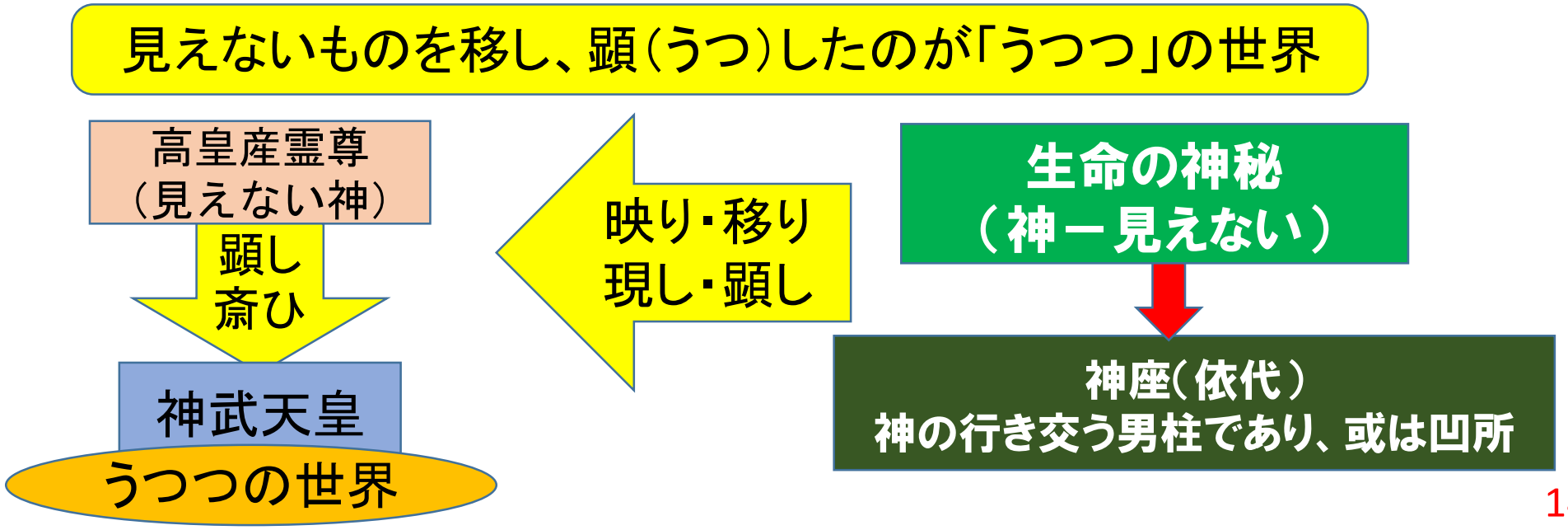
「現し・顕し」と「映り・移り」も同根。

めや」〈万七七一〉 ―いはひ【顕し斎ひ】現実に見えない神を、この世に見えて存在するように斎き祭ること。神を祭るに従って、神霊が天皇の身に憑りついて現われる。「今、高皇産霊尊を以て、朕みづから―を作さむ」〈紀神武即位前〉。「顕斎、此をば于図詩怡破毗といふ」〈紀神武即位前〉 ―おみ【現し臣】

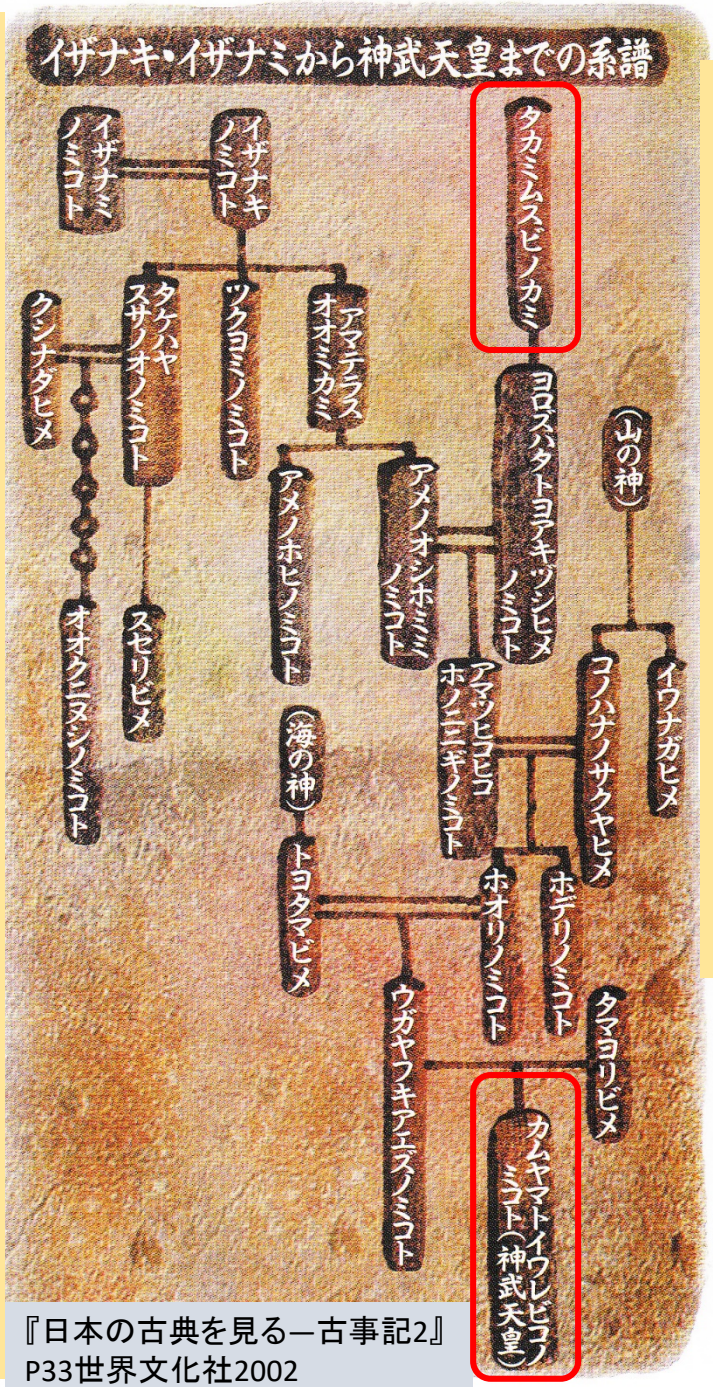
さきの古語辞典の説明でも、例として引かれていた『日本書紀』巻第三の「今、高皇産霊尊を以て、朕親ら顕斎〔顕斎、此をば于図詩恰破毗（うつしはひ）と言ふ。〕を作さむ」という個所につけられた日本古典文学体系本の頭注を、つぎにあらためてみてみることにしよう。

「顕露（あらは）に見えない神の身を、顕に見えるようにして斎（いつ）き祭ることを顕斎という。天皇親ら高皇産霊尊となる儀を行うままに、高皇産霊尊の霊が神武天皇の身に憑りついて、現に神と現われることをいう。仲哀紀・神功紀にも、皇后が自ら神主となり、神がそこに帰（よ）ると記している。」

「うつしいはひ」とは、さきの古語辞典の平明な説明にふたたびたちもどっていえば、「現実に見えない神を、この世に見えて存在するように斎き祭ること」にほかならない。「うつしいはひ」とは、「現実に見えない神」、さらにいえば、祖神としての死んだ神を、「この世に見えて存在するように」することであり、ここで、〈うつす〉ことは、〈移す〉こととして、すでに、〈現前〉や〈現在〉によってはつくすことのできない死と生、不在と存在のかかわりあいを、さらには〈時間〉の契機を、そのうちに含んでいる。したがって、こうして構成された〈うつつ〉の世界は、すでにみたように〈生ける現前〉といったことではとうていつくすことのできぬ、幽明境を接するあたりの奥行きをはらんでいる。（『仮面の解釈学』P194）



高皇産霊尊と神武天皇との関係



『日本の古典を見る―古事記2』P33世界文化社2002

『古事記』では高御産巣日神（たかみむすびのかみ）、『日本書紀』では高皇産霊尊と書かれる。また葦原中津国平定・天孫降臨の際には高木神（たかぎのかみ）という名で登場する。別名の通り、本来は高木が神格化されたものを指したと考えられている。「産霊（むすひ）」は生産・生成を意味する言葉で、神皇産霊神とともに「創造」を神格化した神である。女神的要素を持つ神皇産霊神と対になり、男女の「むすび」を象徴する神であるとも考えられる。

／『古事記』によれば、天地開闢の時、最初に天之御中主神(あめのみなかぬし)が現れ、その次に神産巣日神(かみむすび)と共に高天原に出現したとされるのが高御産巣日神(たかみむすび)という神である。(ウィクペディアより)

「たかみむすびのかみ」は、「高木が神格化されたもの」とあるように、もとは男柱であり、凹所を表す神産巣日神（かみむすび）と対になっていると思われる。

「祝詞（のりと）」とは、正しい生き方をきめた言葉

<u>ノリトは、ノリと、トとの複合語</u>であると考えられる。漢字には、ノリと読まれるものが多いのであるが、その普通に使われる字だけを整理してあげれば、次のとおりである。

（詔勅命令方面）	詔	勅	宣	令	告
（儀式方面）	儀	式	礼	典	
（教育道徳方面）	教	範	師	訓	徳
（法制方面）	法	律	制	憲	
（度量方面）	度	程	規	矩	

このような漢字のもっている意味を総合して考えると、**<u>ノリは正しい生き方をきめる意味の語</u>**であることが知られる。

トについては、諸説があって明解を得ていない・・・・。（『日本古典文学大系1古事記・祝詞』P367.1958.岩波書店）

この祝詞は、出雲の国の造が新任した時に、一年の潔斎を経てのち、朝廷に出て出雲の神からの祝いのことばとして述べ、その後また一年潔斎して、もう一度出て来て述べるものであるが、引用の部分からもあきらかにうかがわれるように、「出雲の臣等が遠つ神」らによる豊葦原の水穂の国の平定、大国主の神の国譲りの次第などを振り返りながら、あらためて恭順を誓い、「大八島国知ろしめす天皇命（すめらみこと）の大御世を、手長（たなが）の大御世と斎（いは）ふ」典型的な神賀の吉詞である。
（『仮面の解釈学』P197）

「出雲の国の造の神賀詞（かむよごと）」

「高天の神王高御魂の命の、皇御孫の命に天の下大八島国を事避さしまつりし時に、出雲の臣等が遠つ神天のほひの命を、国体見に遣はしし時に、天の八重雲をおし別けて、天翔り国翔りて、天の下を見廻りて返事申したまはく、“豊葦原の水穂の国は、晝は五月蝿なす水沸き、夜は火瓮（ほべ）なす光く神あり、石ね・木立・青水沫も事問ひて荒ぶる国なり。しかれども錬め平けて、皇御孫の命に安国と平らけく知ろしまさしめむ”と申して、己命の兒天の夷鳥の命にふつぬしの命を副へて、天降し遣はして、荒ぶる神等を撥ひ平け、国作らしし大神をも媚び鎮めて、大八島国の**現つ事・顕し事**事避さしめき。すなはち大なもちの命の申したまはく、“皇御孫の命の静まりまさむ大倭の国”と申して、己命の和魂を八咫の鏡に取り託けて、倭の大物主くしみかたまの命と名を称へて大御和神なびに座せ、・・・・」（日本古典文学大系『古事記・祝詞』による）『仮面の解釈学』P196

高天原の尊貴なる神、高御魂命が皇御孫命に天の下の大八嶋国の国譲りを仰せになられました時に、出雲臣達の遠祖、天穂日命を国土の形成を覗う為にお遣わしになられました時に、幾重にも重なった雲を押し分けて天を飛翔し国土を見廻られて復命して申し上げられました事は、「豊葦原の水穂国は昼は猛烈な南風が吹き荒れるように荒ぶる神々が騒ぎ夜は炎が燃えさかるように光り輝く恐ろしい神々がはびこっております。岩も樹木も青い水の泡までもが物言い騒ぐ荒れ狂う国でございます。然れどもこれらを鎮定服従させて皇御孫命には安穏平和な国として御統治になられますようにして差し上げます。」と申されて、御自身の御子、天夷鳥命に布都怒志命を副へて天降しお遣わしになられまして荒れ狂う神々を悉く平定され、国土を開拓経営なされました大穴持大神をも心穏やかに鎮められまして大八嶋国の統治の大権を譲られる事を誓わせになられました。その時大穴持命の申し上げられますには、皇御孫命のお鎮まり遊ばされますこの国は大倭国でありますと申されて御自分の和魂を八咫鏡に御霊代とより憑かせて倭の大物主なる櫛厳玉命と御名を唱えて大御和の社に鎮め坐させ、・・（インターネット『出雲国造神賀詞』**現代語訳**より）

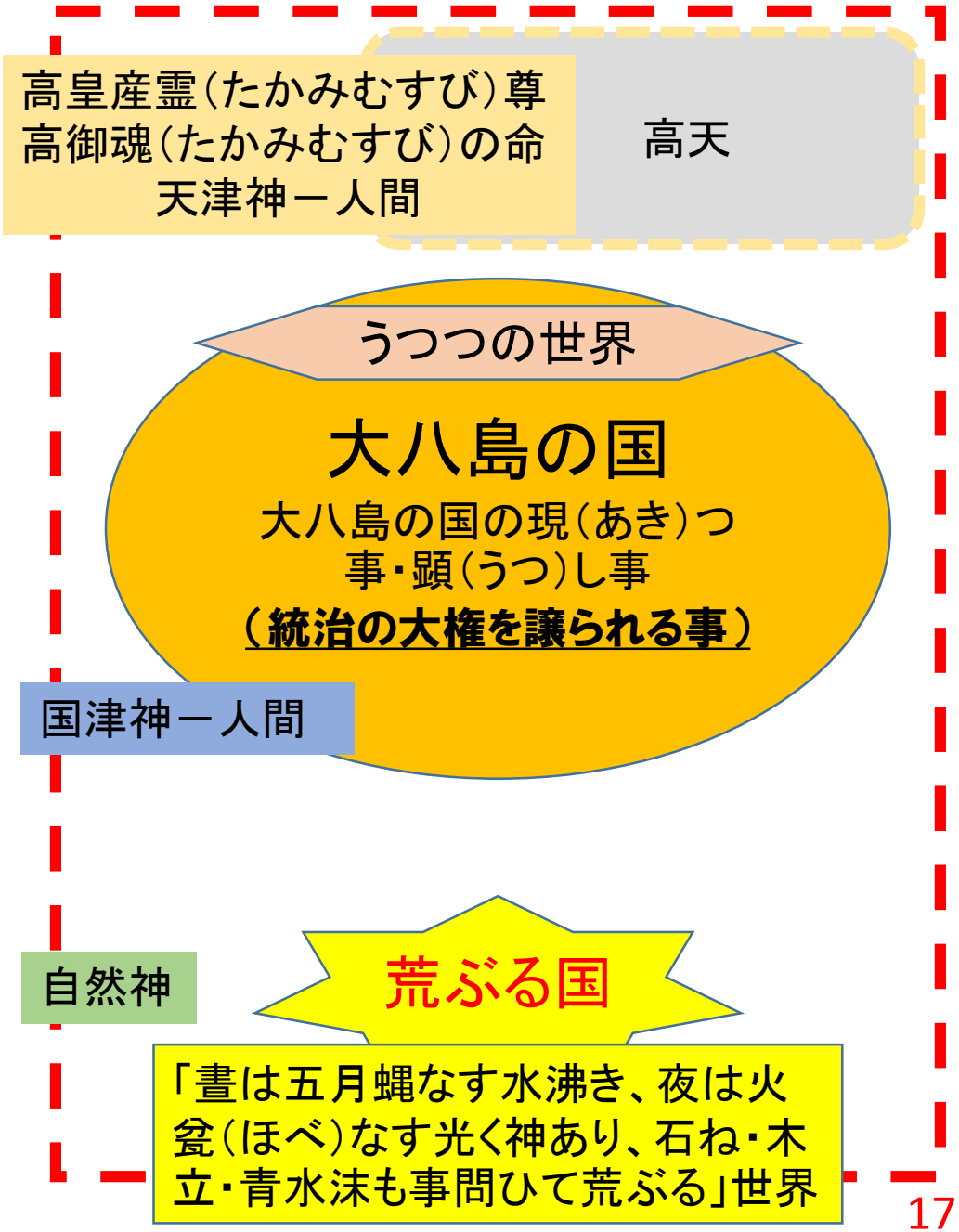
ところで、この神賀詞で、「**顕し事**」ということばの出て来る文脈にあらためて注意を向けてみよう。

「・・・己命の兒天の夷鳥の命にふつぬしの命を副へて、天降し遣はして、荒ぶる神等を撥ひ平け、国作らしし大神をも媚び鎮めて、大八島国の現つ事・顕し事事避さしめき。」

「大八島国の現つ事・顕し事」が、あきつごと、うつしごととして、見られる通りの〈うつつ〉の世界として、一つの表面として構成され、立ちあらわれてくるためには、まず、「晝は五月蝿なす水沸き、夜は火瓮（ほべ）なす光く神あり、石ね・木立・青水沫も事問ひて荒ぶる」が、基本的な下層としてあり、それに加えて、「高天の神王」を頂点とする高みの神たちによるこの騒ぎ立つ国の「鎮め平け」とその皇御孫の命への「事避（よ）せ」がなければならない。

「大八島国の現つ事・顕し事」が、あきつごと・うつしごととして、混沌としてではなく、同一性と秩序ある一貫性とをそなえた世界として成立するためには、こうして、いわば、その上方と下方とに、「高天」と「荒ぶる国」という二つの目に見えぬ世界をひかえていることが必要である。

〈うつつ〉の世界は、うつつならざる、目に見えぬ世界を背後にひかえて立ちあらわれてくるというように、さきにわたしはいっておいたが、その背後にひかえた目に見えぬ世界が、じつは、〈うつつ〉の世界のいわば上方と下方とに二分され、全体としてみれば、「高天」ー「大八島国の顕し事」ー「荒ぶる国」という三層的な構造の中間に〈うつつ〉の世界が位置するという神話的宇宙の結構のうちに位置づけられていることを、さきに引いた神賀詞は、あきらかに示している。（『仮面の解釈学』P197）



三層的な構造として、「天津神―国津神―自然神」の区別もある。本来の神は「自然神」として「荒ぶる国」に押し込められた？

ところで、古代日本のパンテオンの全部が天津神・国津神に包括されていたわけではなかったようである。なるほど、古典には、天津神・国津神の両者だけが対となって言及されている箇所も数多い。しかし、これと並んで、それ以外の雑神が挙げられている場合がある。

『古事記』中巻の仲哀段に、仲哀の急死後、国の大祓いをし、また建内宿禰が沙庭に居て、神の命を請うたところ、次のような神命があり、朝鮮征伐を指令した。

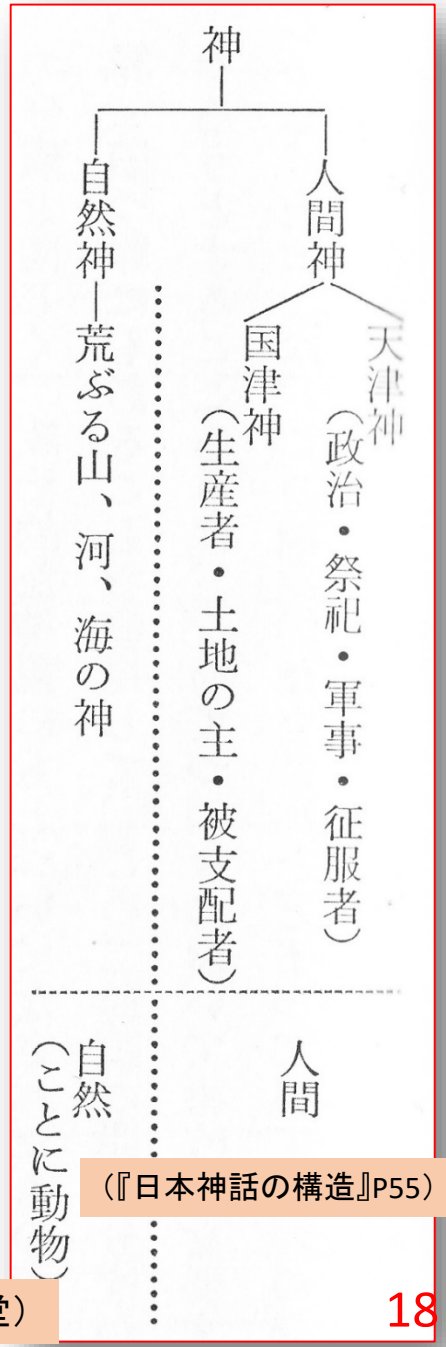
「こは天照らす大御神の御心なり。また底筒の男、中筒の男、上筒の男三柱の大神なり（この時にその三柱の大神の御名は顕したまへり）。今まことにその国を求めむと思ほさば、天つ神地つ祇、また山の神海河の神たちまでに悉に幣帛奉り、我が御魂を御船の上にませて、真木の灰を瓠に納め、また箸と葉盤（ひらで）とを多に作りて、皆皆大海に散らし浮けて、度りますべしとのりたまひき。」

また『出雲風土記』には、天武天皇の甲戌（六七四）年七月十三日に、語臣猪麻呂の娘が和邇に食い殺された事件が出ている。父の猪麻呂は娘を浜のほとりに埋葬し何日もたった後、時機をえらんで場所を占めて神々におろがみ訴えた。

「天つ神千五百万、地つ祇千五百万、並に当の国に静り坐す三百九十九社、及海若等、大神の和魂は静まりて、荒魂は、皆悉に猪麻呂が乞む所に依り給へ。良に神霊し坐しまさば、吾が傷めるを助け給へ。ここを以ちて神霊の神たるを知らむ。」

ここで気がつくのは、この二つの引用文において、天津神・国津神一般や、出雲国内の神社に祀られた神のほかに、海神や、山の神や河の神が挙げられていることである。つまり、天津神・国津神は、三品が指摘したように祖神的性格が濃い。それは、それらが人間の形をとり人間として行動し、かつ一定の人間集団の祖となった神という意味において人間神であることを意味している。神功記におけるその埒外の海、山、河の神とは単なる自然神を意味している。つまり、ここにおいて見られるのは人間と自然という分類である。同様に、出雲国に静り坐す三百九十九社は、人間によって神社に祀られた神々であり、そのまえの天神地祇を地域的に限定したにすぎないが、海神はその外の自然神である。ここでも人間と自然という分類がみられる。

（『日本神話の構造』P52.大林太良.1975.弘文堂）



（『日本神話の構造』P55）

うつつ（移った）の世界

本来の世界

高皇産霊（たかみむすび）尊
高御魂（たかみむすび）の命
天津神ー人間

高天

移る
映る

豊葦原の
水穂の国

現しき青人草
（人、民）

自然神【本来の神ー生命の源】
男柱であり、或は凹所

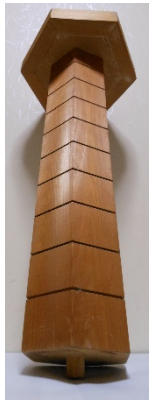
国津神ー人間

大八島の国

大八島の国の現（あき）つ事・顕（うつ）し事
（統治の大権を譲られる事）

引き戻す

かぐらづとめ

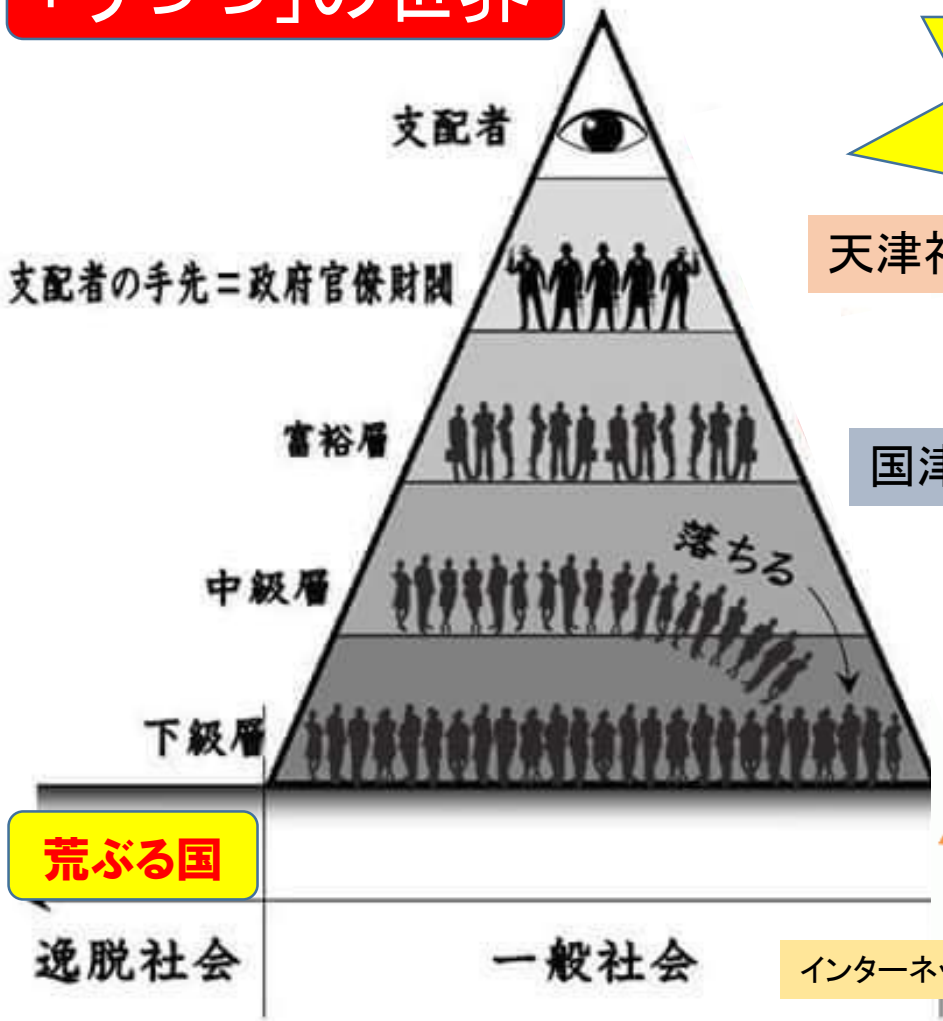


自然神

荒ぶる国

「晝は五月蝿なす水沸き、夜は火瓮（ほべ）なす光く神あり、石ね・木立・青水沫も事問ひて荒ぶる」世界

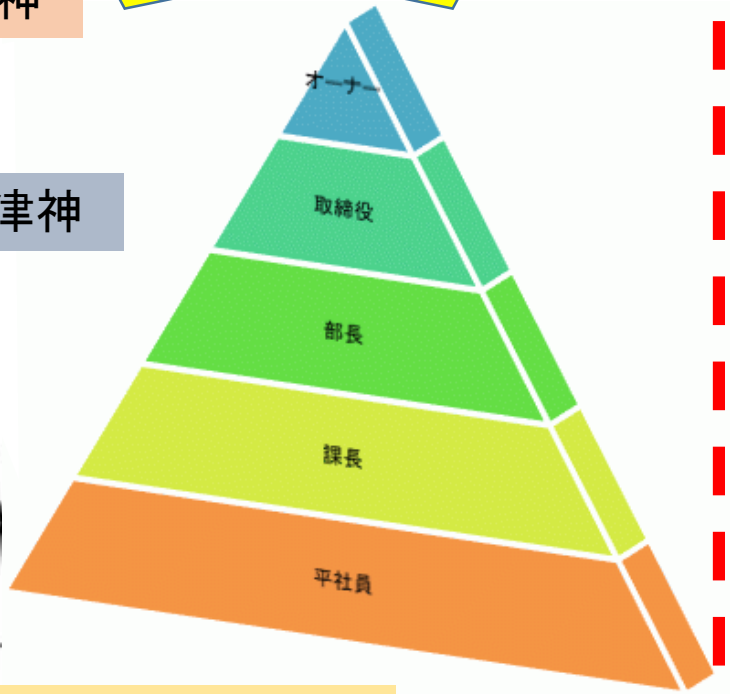
「うつつ」の世界



通常の〈うつつ〉の世界を構成する構成規則（のり）

天津神

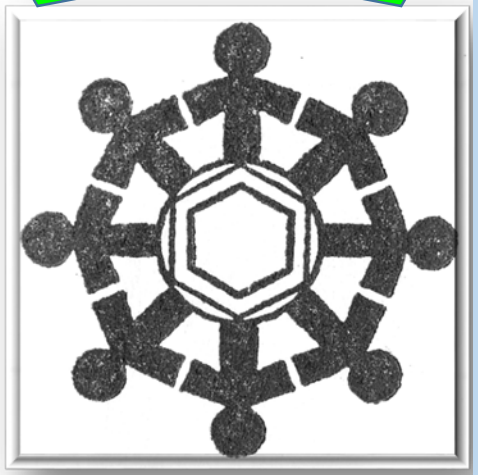
国津神



インターネット「社会構造の図集」より

別種の構成原理をもった世界

かぐらづとめ



櫟本分署跡保存会作成の「かんろだいづとめ」イメージ図

6号50.
このよふのしんじつの神月日なり
　あとなるわみなどふぐなるそや
13号47.
それしらすみなにんけんの心でわ
　なんどたかびくあるとをもふて

一片の物体にすぎぬ仮面が、世界と心の深みからくみとられたより深い生命をおびてかがやき出る。（P204『仮面の解釈学』）